

『菅家後集』編纂事情の一考察

—— 卷尾の詩「謫居春雪」の解釈を通して ——

一

菅原道真の太宰府謫居時代に詠作された作品は巻頭の「476自詠」^①から巻尾の「514謫居春雪」まで三十九首残されている。今回取り挙げてみたいのは巻尾の「514謫居春雪」である。この作品については、岩波古典文学大系『菅家文草 菅家後集』の頭注で川口久雄氏が、「これが道真の絶筆の詩である。延喜三年二月二十五日、彼は太宰府の配所で死んだ」^②と説明を加えられているのを筆頭にこの詩を辞世の句だというとなえ方が先学よりなされてきたように思う。筆者も久しくこの作品の詠作事情については、この先学の指摘のごとく考えてきた。

ところが、太宰府謫居中に詠まれた作品を逐一注釈を施す作業を続けるなかで、この巻尾に置かれている「514謫居春雪」は実は辞世の詩ではないのではないかという疑問が生じて来た。本稿はその疑問に対する筆者の一つの問題提起として、更には太宰府の地より、朋友紀長谷雄に託した『菅家後集』の編纂事情の一端を垣間見るところを意図している。

一一

それではまず「514謫居春雪」を取り挙げる。ここでは作品の内容の考察を主眼として頁を進める。